

一人なん しています。

わだいのつじょう

— 116 —

Kさん

災害時に孤立するおそれのある集落が和歌山県では583あり(県発表、H26)、こうした集落の多くで高齢化が進んでいます。甚大な被害を被った紀伊半島大水害(2011年9月)からもつづぐ5年。災害時孤立可能性集落について調査し論文発表をしたことから、新聞記者さんの取材を受けました。

調査はこの大水害時の半年後、和歌山県の中でも最も高齢化が進んだ山村、人口100人ほどのH集落で行いました。集落には国道が通っていますが、道幅も

狭く傾斜地の崩落などですく不通になります。他地域への交通不全ばかりか、集落内での孤立可能性もた

くさんあります。川の両岸の山肌の家が散

在するH集落では壊滅的な被害はなかったものの、数日降り続く尋常ではない大雨、山腹から滝のように噴出する水、岩石が転がり流れる川の轟音を聞きながら不安な日々を過ごしました。

避難を必要とするような緊急時に人は不安の中にいます。では、安心要素は何だったのでしょうか。聞き取りで興味深い結果ができました。

頼りになる人



むらの風景

「緊急時に何を一番頼りにしたか」の質問に、71%が家族や近所、地区の役員など「人間」を頼りにしていたのです。インターネットは住民の半数以上が75歳以上のH集落ではほぼ機能していませんでした。住民が「頼りにしている」と頻繁に名前を挙げたのは集落北方の班のTさんと中心部に住むKさんでした。

Tさんの班は5戸。夫婦

ふたり暮らしのT家の他は4戸が83歳、72歳、84歳、91歳の女性のひとり暮らし。全員が班で唯一の男性である87歳のTさんを頼りにしていました。Tさんもまた彼女たちを日常的に気にかける元気なリーダーでした。

80歳のKさんは、台風では大工道具を持ち各家の防風対策に回り、車避難所に送るなど普段から皆に頼

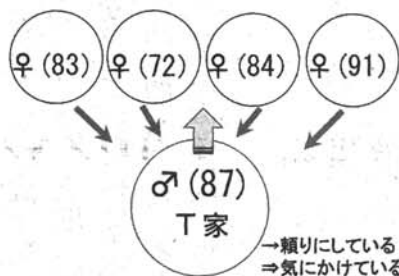
りにされる存在でした。驚いたことにKさんからつながった親戚構造が、インタビューで出て来た名前だけでも15人もいました。69歳を最年少に全員が70代、80代。このようなつながりは集落の中に幾つかあり、車に乗せて避難する、互いに電話で安否を確認するなど災害時の相互

援助の強い関係性が見られたのです。住民の要に区長さんや区の役員がおり、区長を補佐する自衛的な組織が見回りや危険物の除去などを行っていました。高台に住む独居の高齢女性は豪雨の中逃げる術もなく、「もうここで死のうと思っていた。区長が来てくれて助かった」と震えながら語ってくれました。

5年後

緊急時に大切なものとして、「絆」という言葉がよく聞かれますが、H集落で見たのは、その言葉以上の、伝統的に組み上げられてきた細かく強固な結びつきでした。それぞれの親類、姻戚、近所、同級生、とつながる結びつきの連鎖

でした。それは緊急時を支える集落のインフラなのでした。なぜそんな不便な場所に住むのか、と記者は聞きました。私は答えました。



班で頼りにする関係

「そこに生まれたから。」

そこに生まれ、そこで子を産み、そこで暮らし続けてきた。しかし今、力のある若い人がいない…。

記者は言いました。10年後にはどうなっているのだろう…。いや、と私は答えました。おそらく5年では無いでしょうか、5年で大きく変わる、と。Kさんはすっかり老い、今年になって運転免許を返上したと聞きました。村の紐帯の要だった、Kさんのような方の後継者は現れるのでしょうか。

プロフィール



湯崎真梨子 (ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。